
悪ノハッピーエンド

白執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪ノハッピーエンド

【Nコード】

N4950M

【作者名】

白執事

【あらすじ】

悪ノシリーズのハッピーエンドverです

王女であるリンと召使レン。両片思いの二人が幸せになるまでのお話です。身分差や周囲からの反対を乗り越えてながら絆を深め合う二人に次第に理解者も現れてきて……。

FFですが原作を知らなくても楽しめるようになっていきます。

プロローグ（前書き）

この作品は「悪ノ」シリーズの無許可二次創作であり、原作とは違ったルート、結末を迎えます

吐き気・寒気を感じる方はプラウザバックして下さい！！

プロローグ

むかしむかしの少女と少年の話をしようか。

何、そんな難しい話じゃないんだ。

それは鐘の音が全ての始まりだったんだ。

リンゴーンリンゴーン。

正午を告げる鐘になる。

「王様っ！ 無事に王妃様が出産なされましたっ！！」

部屋から飛び出してきたメイドが部屋の外で落ち着きなく歩き回っていた男に伝える。そわそわと歩きまわっていた初老の、しかし身なりが良い男は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「そうか。男のか？ 女の子？ どちらにせよめでたいことだ」

そういつてメイドに笑顔を振りまく男。その顔には少しの憂いもない。

当然だ。

ここ、黄色の国では長いこと子宝に恵まれなかった。そこに王妃の懐妊の知らせ。国を上げてのお祭り騒ぎだ。

「それが……」

先ほどまで嬉しそうにしていたメイドに戸惑いの表情が浮かぶ。

「どうしたのだ？ まさか……」

男は信じたくない、いや信じられないといった絶望の色をその顔に浮かべた。

プロローグ（後書き）

小説って難しい（汗

もうレンリンいいよレンリン（殴

誤字脱字等あったら指摘おねがいします

ソノー（前書き）

原作と話の展開が違います（汗
原作を汚すなバーローという人は逃げて下さい！！

ソノ一

「レンーっ！ レンーっ！」

静かなはずの昼下がりの廊下にはたばたと走り回る音が聞こえる。
「王女様、お願いですからたかが召使ごときを探して走り回るなど品の無い行いをお止め下さい」

金髪の髪を一つに束ねた青年、いやまだ少年と呼ぶべきだろう、が王女と呼ぶ少女に対して膝をつきながら忠告をする。勿論王女の未来を考えての忠告である。

そんな家臣の心を知らずか、これまた同じくらいの年の少女が頬を膨らませながら反論した。

「だってね、街を歩いていたら街の人がね、王女様にとって花をくれたんだよー！」

確かに王女の手には黄色い花が握られている。元氣一杯に振り回されていたせいか多少萎れているが。

「それはよかったですね。リン様が王国の民から愛されるのは良いことです。ではなぜそれを僕に？」

膝をついたままの少年が問いかける。それに対し少女は答えるより先にずいっ、と手を突き出した。

「？」

意味が分からず呆ける少年。

「だから！ レンにこのお花あげるっ！ リンからのプレゼント！」
そしてまたずいっ、少年に向けて手を差し出す。その笑顔には一点の曇りもない。

「……受け取れません。僕は召使ですから」

そう言って微笑んで少年は立ち上がった。

てつきり受け取って貰えると思っていた少女は機嫌を損ねたらし

く、横をむいて駆け出してしまった。

「レンの馬鹿ーっ！ 大嫌いつなんだからね！」

花を散らしながら叫ぶ少女に少年はあくまで冷静に声を掛けその場を後にした。

「王女様。もうそろそろ家庭教師の方がいらっしやいます。早くご準備を」

もうすっかり暗くなってしまった。王女に頼まれた明日のおやつを作っていたらいつの間にかこんな時間になっちゃったな。

王室用のがらんとした食堂で一人後片付けをしていると、ついつい昼間の出来事を思い出してしまう。

あの時僕は上手く微笑んでいられただろうか？

…… 本当は僕だつて受け取りたかった。

彼女から花を貰えるという行為そのものが嬉しかった。

だけど、僕は召使で。彼女はこの国のたった一人の正統後継者なわけ。

身分違いもいいところだ。

王女がお稽古にいった後、古株の召使に怒鳴られた。

召使ごときが親しげに王女様と喋っているの見られたら首が飛ぶ

ぞつ、と。彼が僕のためを思っ言ってくれてるのは知っている。
彼は召使の仲間うちでも親のいない僕を特に可愛がってくれたから。

孤児だった僕は今の召使長に拾われていなかったらとくに死んでる。そんな身でこんなことを考えるのはいけないんだろう。

だけど、

何度、王族の血縁に生まれていたら、いや貴族に生まれていたらと願っただろう。

何度、僕に彼女と釣り合う身分があればと、願っただろう。

でも所詮は願いは願いで現実になることなんてない。

今更ながら一人で後片付けをする自分が惨めに感じられた。

夜、メイドを部屋から出して考えるのはレンのこと。

昼間に無神経に私が花をあげるなんて言っだから後でレンが召使に怒られているのを見た。

私はいつもそうだ。

我侭ばっか言っレを困らせて、それで勝手に怒る。毎日がその繰り返し。

小さい頃からそうだった。

レンと同年の私は物心ついたときからレンを引っ張りまわしていた。今と違ってレンも一緒に楽しそうに笑ってくれていたけど。

でも遊んだのがバレると怒られるのは必ずレンだった。大臣や親衛兵などに殴られもしていた。遊びに連れ出したのは私なのに。

そしていつの間にかレンは私と遊ばなくなった。

私がおかするのを遠くから眺めているだけ。困ったときや悲しいときは助けてくれる。私がその時一番望んでいることを出来る限り叶えてくれる。それが無理でも一緒についていてくれた。

ただそれだけ。

これは私の一方的な気持ちだって分かってる。

レンは私のことなんて仕えるべき主くらいにしか思っていないって分かってるけど。

それでもレンの特別になりたいと願うのは罪だろうか。
レンの一番になりたいと願ってはいけないのだろうか。

ソノー（後書き）

む、無駄に視点の切り替えが多い。

一応補足として

二人は自分達が兄弟だってこと知らないって設定です

ソノ二

黄色の国の建国祭の季節がやってきた。

毎年七月に開催されるそれは国をあげてのお祭りであり、民衆の一年間での最大の楽しみと言えるイベントである。そのため街は祭りが行われる七月の末日の一ヶ月ほど活気にあふれ普段とは違った熱気を見せる。

そんな活気あふれる街に王女が混じっていると誰が思うだろうか。それも護衛もつけずに。

「王女様っ！ もう少しフードを深くかぶって下さい！！ 王女様の髪は目だつてしまいます！」

小声でリンという少女に注意するレン。その顔には周囲に対する警戒の色が見て取れる。

今はリンたつての希望で街を非公式にぶらぶらしている。いわゆるおしのびである。

「もーレンはうるさいなあ！ 少しくらい見えたつてばれないよー。大体こんな面白そうなものばっかなのにフードなんか被ってたら見えないじゃん！！」

レンの心を知ってか知らずか、多分後者だが、リンはきらきらと目を輝かせながら屋台の品物を眺めている。フードが落ちかかっているのもう少しで髪が見えそうだ。

鼻歌を歌いだしたくなるような気分でリンは屋台の色とりどりの

品物を眺めていた。どれも窮屈な宮殿では見られない楽しそうなものばかり。

普段と違ってお忍びで来ている分、周囲の目を気にしなくいいと考えているのかいつもより楽しそうだ。本来なら普段より気をつけなければならぬのだが。

「王女様！　こんなところに王女様を連れて来ていると分かったら僕は首になってしまいます。お願いですからフードを……」

自分のフードも直しながらレンが懇願する。彼の髪もまたリンと同じような向日葵のような暖かい黄色だ。

道いく人々の髪の色は皆、茶色や赤ばかり。二人の髪はとても目立つ。

現在、この国には黄色い髪は珍しい。王族とごく少数の民衆だけだ。

なのでこの国の一般家庭では黄色い髪の子供が生まれると一族をあげて祝うめでたいことなのだが……。

しかし二人はお忍び中である。レンとしてはできれば目立ちたくない。

ただでさえ、そっくりな顔をしている二人。周りからの視線が集まってしまう。

口では自分の為のように言っているが本当はリンを犯罪などに巻き込ませないため。

「えー……。もう仕方ないなあ。じゃあ言うこと聞いてあげるかわりにレンは今日一日リンのこと名前で呼んでねー！」

いい事を思いついたと言わんばかりの顔でレンに命令する。

王女を名前で呼ぶなど本来なら言語道断だが背に腹は代えられない。

「えっ……！？　で、でも王女様「あー！！　約束破ったらいけないんだよ！　ほ・らレン？」」

笑顔で脅迫まがいをするリンにフードを取らせるわけにはいかないレンは腹をくくった。

「了解しました、リン様。今日一日だけ、ですよ」

苦笑しつつも名前を呼んでくれたレンに、上機嫌の笑みを見せリンは彼を次の屋台に引っ張っていった。

「……リン様、そろそろ御戻りにならなければならない時間です」
楽しい時間はあっという間に過ぎ、もう夕暮れである。傾いた太陽が柔らかい光で街を包み込んでいる。

レンはたくさん荷物に埋もれながらもリンにそう提案した。

ペロペロとアイスを舐めていたリンは不服そうに顔をゆがませた。

「やだなあ……。じゃあレン！最後に一個だけよっていい？」

日没までもうそんなに時間はない。本来なら今すぐ帰るべきだろう。

が、リンの期待に満ちた瞳に勝てなかったレンは

「なるべく早くして下さいね」

と了承してしまった。

リンが最後にと選んだ屋台は小さなアクセサリーのお店。中には綺麗な宝石をあしらった小物がところ狭しと並べられている。

一人で買ってくるからと渋るレンを外に待たせ、リンは二つの首飾りを買って出てきた。ころなしか上機嫌そうに見える。

「はい、これレンの分ね！リンとおそろいなんだよ！！」レンの

目みたいに綺麗な黄色の宝石がついてるの！」

レンに手渡される黄色い宝石がついた首飾り。その宝石は驚くほど透きとおっていて夕日を反射して手の中で輝いている。

いきなり手渡されたレンは困ったようにリンにそれを返す。

「そんな……受け取れません。僕は」

召使ですから、と続けようとしたレンにリンが強制的に首にかけさせた。フードを被っていたため上手くかけられていないがリンは気にしていないようだ。

「駄目！ この間、お花を受け取らなかった罰です！ リンが良いって言ったんだからいいの。それと召使だから、とか次言ったらお父様に頼んでレンの晩御飯抜きにするからね！！」

びしっ指をさして叫ぶ。

「ですが……」

尚も食い下がるレンにリンの止めの一言。

「もうリンの言うこと聞いてくれなきゃこれから絶対レンと口きかないもん！！」

面食らっていたレンもやがて苦笑いをして首飾りを綺麗にかけなおした。

「分かりました、リン様。では僕からお願いです。リン様の分の首飾りを僕にかけさせて下さい」

召使には過ぎた願いだと分かっている。それでもレンはそれを望んだ。

一瞬戸惑ったように視線を揺るがせたリンはほんの少し首をたてに振った。

「いいよ……。レン、かけて」

目を瞑り、まるでキスをする恋人のように静かに待つリンにレンはそつと首飾りをかけた。

目を開けて首にかかっている物を見て二人で笑いあう。なぜか御そろいの首飾りをつけているというだけで不思議と二人が繋がっているような気持ちになれたからだ。

「……帰りましょうか」

しばらく笑いあった後、レンがリンに笑顔を向けながら手を差し出す。

「うん。また今度、二人で来ようね！」

王女を守る騎士のように差し出された手をとってリンは元気に宣言する。

「はい。また何時か、二人で」

静かに、でも力づよく頷いたレンに満足しながら二人は帰路に着いた。

ソノ三（前書き）

大分放置していてすみません……。
これからもペースは変わらないかも……。です。

ソノ三

黄の王国と呼ばれているこの国は商業が盛んで交易を国をあげて推奨している。当然人の出入りも増えるわけで各国の王族も遊びに来る。いや、商談を成立させに来るのだが現国王である王女様の父上の人柄ゆえかいつの間にか宴会のような雰囲気になってしまっただ。

そんないつも通りのパーティの夜、珍しく王女様は不機嫌だった。

「もうっ！ お父様ったら失礼しちゃうわ！ 私だってダンスくらい踊れるのに！！」

黄色い髪を綺麗に束ね、頬を膨らます王女様。国王様の命令とはいえ、王女様の傍でパーティに参加できて舞い上がっている僕とは正反対の不機嫌さ具合だ。

「国王様は王女様が社交界デビューするのは後三週間後のパーティだと仰っていらっしゃったじゃありませんか。三週間などあつという間ですよ」

そう、あつという間だ。あつという間で王女様は僕の手の届かない場所へ一人で行けてしまうようになる。たまらなく胸が痛んだが、顔に出さないように微笑んだ。

ポーカーフフェイスを身に着けたのはいつごろだっただろう。そん

な過去への回想が一瞬とはいえ僕の意識を奪ったのに王女様が気づいたのかさらに頬をふくらませた。

「もー！ レンもレンで別の事考えてるでしょ！ レンもお父様もリンを子供扱いし過ぎなのよ！」

ポカポカと全く痛くない小さな手のひらで叩かれた。壁際とはいえ、あまり王族らしくない振る舞いかもしれない。

機嫌が悪くなる事を覚悟して軽めに礼をしながら忠告する。

「王女様、各国の殿下もお見えになっていきますので振る舞いは」「うるさーい！」

駄々をこねるような王女様の行動に段々どうすればいいのか判らなくなってくる。

普段なら素直な部分もある王女様だが、今日に限っては特に機嫌が悪いようだ。今にもうなり声をあげそうな表情に苦笑が零れた。

が、それがまずかつたらしい。王女様は眉間に思いつきり皺を寄せた。不味い。本当に不機嫌な合図だ。

「おや？ リンちゃん？」

「カイトさん！！」

最高のタイミングで入ってきてくれたのは海の方この王子殿下、カイト様だ。青の国と呼ばれるだけあって見事な青い髪と同じ優しい瞳でリンを宥める姿は尊敬に値する。

……だけど、少しだけ面白くないと思ってしまった僕もいた訳で。どうにもならない胸に痛みが走った。

一方王女様はカイト様が来たことで一気に上機嫌、僕の事を置いて喋りだしている。

とても楽しそうに。軽やかな笑顔は大人っぽいドレスとよく似合っていて泣きたくなった。いっそ泣けたら楽なんだろう。僕には出来ない相談だけれど。

カイト様には僕にはない身分がある。王女様を幸せに出来る度量もある。幸い王女様の事を可愛がってくれているようだし、王国としてもカイト様と王女様が結ばれば発展するだろう。

判ってはいても、僕には辛い現実には耐え切れなかった。子供染み、一方的な独占欲。

王女様を笑顔にするのは僕でありたかった。僕が王女様を支えていたいんだ。

こっそりと二人の前から姿を消してテラスへ行った。涙が零れないように必死に笑顔を貼り付けた。

ああ、どうしてこうも上手くいかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4950m/>

悪ノハッピーエンド

2011年10月11日22時00分発行